〝幸せ〟の差異を超えて
――カミングアウトと家族――

勝又 栄政
KATSUMATA Terumasa

「あんたが男なわけないでしょ！　あんたは本当に誰よりもわがままな子だわ！」

十九歳の時、私が初めて母親にトランスジェンダーであることをカミングアウトした悪夢のような時間は、こんな一言から始まった。

私は、出生時に割り当てられた性別は「女性」で、「男性」としての生活を望むトランスジェンダー男性の一人である。祖母にとっては孫七人目にして初めての女の子、両親にとっては初めての娘で、毎日「女の子が生まれますように」と願掛けをした末に誕生した〝待望の子〟だった。ヒラヒラとなびくスカート、長い髪に赤いランドセル、カバンの中にはキティちゃんの箸ケースにランチョンマット、手にはピンクの鍵盤ハーモニカ……身の周りのすべてのものが〝女の子らしさ〟に彩られいく日常。

「僕がしたいことは、本当は違うの。」

その一言が、どれだけ周囲を悲しませ、愛する人たちを裏切り傷つけるかを知っていた。だから私は、「嘘」を選んだ。周りを悲しませないために、そして、自分が愛され続けるために。しかし、その道も簡単ではなかった。嘘をついた分だけ、自己を否定することに繋がり、やがて偽りの自分を通してしか、社会と関われなくなっていった。歪みが身体に出始めたのは小学生の時。自傷行為が止められなくなった。さらにそれに追い打ちをかけるように女性としての身体の変化も訪れた。何も嫌なことは、胸が膨らんだり、生理がきたりといった現象そのものだけではない。胸が出れば、ブラジャーを買うために女性用の下着エリアに向かい、下着を手に取り選択し、レジに持っていく。このような営みの重なりが、私に「女」を知らしめるのである。こうした日々の中で、私は何度も〝女性化〟の圧力に潰されそうになった。

そんな私に光が差すような出来事が「性別移行」の存在を知ったことであった。日本では一九九八年に初めて正式に性別適合手術が成功し、二〇〇四年には、性別の変更が法律上も可

能になった。しかし、もちろん当時はそのような知識を学校で習うはずもなく、病院を突き止めるにも月日を要した。ようやくたどり着いた病院から言われたことは「未成年だから治療には親の許可がいる」。つまりカミングアウトの必要性を告げられたのだ。

だが結果は、冒頭の母親の言葉である。たった一言。「私はこう生きたい」。数秒にも満たない私の本音を、母は受け取らなかった。悩み、もがき、這いつくばって生き延びた約二十年を「わがまま」と一蹴する母親は、当時の私にとって「差別者」以外の何者でもなかった。

――しかし、それから十年以上。私は母と幾度となくぶつかり対話を重ね、彼女（母）は私の言葉を「受け取らなかった」のではなく、「受け取れなかった」のだ、という考えに変化した。彼女の生い立ち、子育てへの熱意と失敗、周囲や社会からの要請……私はこの十年で、母がいかなる時に怒り・悲しみ・喜び・苦しみ、それを乗り越えてきたのか、そこに「性」がどう位置付いてきたのか、その時代を生き抜いてきた空気と温度を彼女自身の語りから見たのである。その中で、私たちは、互いが描く〝幸せの形〟には大きな差異があり、対立していたことに気づいた。具体的にいえば、彼女は戦後の近代家族の時代を生き、専業主婦としてケア役割を担いながら、子どもとの接点を多く持ってきた。結婚して仕事を辞め、日々奮闘しながら四人の子どもを育てたという彼女の誇りや幸せは家庭にあり、男性／女性らしさが称揚される時代を生き抜いてきたのである。その母親の六十年が育んできた視線と、「性別は男性／女性しかない」という考え（男女二元論）が主流の世界の中で、性の間を彷徨いつつも、「性は多様である」という捉え方を微かな灯火として生きてきた二十年を持つ私の視線とでは、カミングアウトによって現れた「トランスジェンダー」という存在への認識は大きく異なるだろう。

その異なりを知った時から、私たちは、互いに相手が〝幸せを奪おうとしている〟のではなく、〝幸せの形に差異がある〟のだということを遠回りをしながら共有し、今に至るまで互いの幸せが存続できる感覚／間隔を模索し続けている。

家族とは、近いようで遠い。同じものを見てきたようで、何十年もの時代や感覚のズレが共存する、身近な異世界の住人の集まりだ。だがしばしば「家族なんだから」と一括りにし、「私と同じ幸せ」をあたかも相手も望んでいるかのように思い込んでしまっている気がする。カミングアウトを経て、相手を受け入れていくというプロセスは、「性的マイノリティを理解し、受け入れること」と思う人が多いかもしれない。もちろん、それが誤っているとは思わない。ただ、その人の生きる時代や環境、感覚に触れ、そこに在る、またはそこから導き出された、〝その人にとっての幸せの形〟をよく知ろうとすることの方が、私には大事なように思えてならない。ゲイ当事者で文化人類学者の砂川秀樹氏は「カミングアウトは、伝える側と伝えられた側との関係性が作り直される行為の始まり」（『カミングアウト』朝日新書、二〇一八）と表現する。まさにそのような軌跡を、私は母と歩んできたのだろう。

もしあなたが誰かから何かを打ち明けられた時、やはり、その人自身を受けとめてあげてほしい。意を決して打ち明けた側の、当事者の一人として、心からそう思う。だけれども、もし、それがすぐに叶わない時には、少しだけ自身・相手の文脈に想いを馳せてみるのも良いのかもしれない。小さいけれど、その瞬間から、互いの関係性の作り直し／紡ぎ直しが始まり、一緒に歩む未来の形がつくられていくのではないかと私は思う。

（かつまた　てるまさ・日本学術振興会特別研究員DC1／立命館大学大学院博士課程）
著書に、『親子は生きづらい――〝トランスジェンダー〟をめぐる家族の物語』（金剛出版、二〇二二）など。